

令和7(2025)年度 水道土木奨学金事業
終了報告書



公益財団法人

水道土木振興財団

1. はじめに

当財団では、持続可能な水環境と社会基盤の整備に貢献する次世代の技術者・研究者を支援することを目的に「水道土木奨学金事業」を実施している。

本事業は、将来の水道土木分野を支える優秀な人材に対し、経済的負担を軽減することで、安心して学業や研究に集中できる環境を整えるものである。

2年目となる令和7（2025）年度も、全国の大学・大学院に在籍する多数の学生が奨学生として採択され、それぞれの立場から専門分野の学修・研究、地域社会への関わりに取り組んでいる。

本報告書は、奨学生から提出された終了報告書の内容を基に、学業・研究の進捗や生活環境の変化、奨学金支援による効果を総括する。

2. 学生生活の状況（学業、部活、ボランティア、サークル等）

奨学生の多くは、大学での講義・実験・研究活動に意欲的に取り組んでおり、専門知識の修得に加え、課題解決型の学習や卒業研究、大学院での研究テーマに真剣に向き合っている。

ある学生は、下水処理プロセスに関する長期運転実験や微生物解析に取り組み、データ解析および国際学会発表に向けた準備を進めている。

また別の学生は、地震による配水管被害に関する研究に取り組み、学会発表や論文投稿を通じて研究成果の発信を行っている。

さらに、海外における現地調査や国際学会への参加を通じて、技術動向の把握や研究者間の交流を行うなど、国際的な視野を広げる活動も見られた。

加えて、大学の講義・研究に加え、ボランティア活動や地域活動に参加し、社会との関わりを持ちながら実践的な経験を積んでいる学生も確認された。

課外活動や研究活動を通じて、主体性や実践力を高めている学生もおり、組織運営やリーダーシップの醸成につながっている。

これらの活動を通じて、専門性の向上のみならず、社会人として求められる能力の基盤形成が図られている。

奨学金の支援により、アルバイト時間を減らし、講義や研究、課外活動に充てる時間が増えたという声が多く寄せられており、経済的支援が精神面・時間面の両面で効果を発揮している。

3. 活動成果と成長の実感

奨学生の研究活動は、水道・土木分野における多様な課題を対象として展開されており、上下水道の維持管理、水処理技術、地震・防災インフラ、構造物の劣化対策、データ解析等の分野において着実な成果が報告されている。

具体的には、下水処理プロセスに関する長期運転実験や微生物解析を通じた研究の進展、配水管網の被害分析や耐震性評価に関する研究の深化など、社会インフラの持続性向上に資する知見の蓄積が見られた。また、これらの研究成果を基に、学会発表や論文投稿を行い、実際に学術論文として掲載に至った事例や、学会において評価・表彰を受けた事例も確認されている。

さらに、海外における現地調査や国際学会への参加を通じて、研究内容を国際的な視点から再評価し、新たな課題認識や研究の方向性を得たとの報告も見られた。これにより、単なる研究成果の蓄積にとどまらず、グローバルな視野に基づく研究の高度化が図られている。

また、研究活動に加え、インターンシップや現場見学、行政・企業との接点を通じて、実務との接続を意識した学びを得ている点も特徴的である。現場での課題認識を研究に反映させることで、より実践的かつ社会実装を見据えた研究へと発展させている。

このような取り組みを通じて、奨学生は専門知識・研究能力の向上に加え、課題発見力、分析力、発信力といった総合的な能力を着実に高めている。また、自らの研究が社会にどのように貢献し得るかを意識する姿勢が強まっており、技術者・研究者としての自覚と責任感の醸成が見られる。

4. 支援への感謝と今後への展望

奨学生の多くが、本奨学金による支援に対して深い感謝の意を示しており、「経済的な不安が軽減されたことで学業や研究に専念できた」「生活面の安定により精神的な余裕が生まれた」といった声が多数寄せられている。

特に、学費や生活費の負担軽減に加え、学会参加や研究活動、海外渡航等への支出に対する不安が解消されたことで、これまで経済的制約により十分に取り組むことが難しかった活動にも積極的に挑戦できるようになったとの報告が見られた。また、「アルバイト時間を削減できたことで研究時間を確保できた」「自身の将来に向けた挑戦に踏み出すことができた」といった具体的な変化も多く確認されている。

さらに、奨学生として採用されたこと自体が大きな励みとなり、「支援を受けている自覚から、より高い目標に向けて努力する意識が強まった」「社会に貢献できる人材として成長したいという意欲が高まった」といった、精神面での成長に関する意見も多く見られた。

今後の展望としては、水道インフラの維持管理、災害対応、水処理技術の高度化、環境保全など、水道・土木分野における社会課題の解決に貢献したいという志向が強く示されている。地方自治体においてインフラ整備に携わることを志す者や、民間企業にお

いて技術者として社会基盤を支えることを目指す者、さらには大学院や博士課程へ進学し研究を深化させることを志す者など、それぞれの進路において社会との関わりを意識した将来像が描かれている。

また、国際的な視点を持った技術者・研究者として活躍することを目標とし、海外での研究活動や国際機関との連携を視野に入れるなど、より広い舞台での貢献を目指す意欲も見られた。

このように、奨学金による支援は、奨学生の学業・研究の推進にとどまらず、将来に対する明確な目標設定と社会貢献意識の醸成に大きく寄与していることが確認された。

5. 総括

令和7（2025）年度の奨学生は、学業・研究・社会活動の各側面において主体的に取り組み、それぞれの分野で着実な成果を積み重ねていることが確認された。

研究面では、上下水道の維持管理や水処理技術、防災インフラ等に関する多様な課題に対し、実践的な取り組みが進められ、学会発表や論文掲載などの成果にもつながっている。また、海外での研究活動や国際学会への参加を通じて、視野の拡大と研究の深化が図られている。

学生生活においても、奨学金の支援により経済的負担が軽減され、研究や学業に専念できる環境が整えられている。

さらに、奨学生の多くが、水道・土木分野における社会課題の解決に貢献する意欲を有しており、公務員、企業技術者、研究者などとして社会基盤を支える将来像を描いている。

以上のことから、本奨学金事業は、奨学生の学修環境の充実および将来への意識形成に大きく寄与しているものといえる。今後も当財団は、志ある学生への支援を継続し、水道・土木分野を担う人材の育成に貢献していく。奨学生のさらなる成長と活躍を期待し、本年度の終了報告をここに総括する。

以上